

モニター意見

20031226 イラン・バム地震被害調査速報の衝撃度

向谷 光彦

昨年末、アジアの同胞であるイランにて大きな地震が発生したことをどれだけの関係者が、記憶に留めているだろうか。また、この地震の復興活動時に、未調査の遺跡が発見されたことは、シルクロードを共有する確かな証として、認識されなければならないだろう。私も、香川大学に研究でおみえになったイランの関係者にお話を伺う機会を得て、その惨状に驚愕した次第である。本論文が学会誌として記録されることの価値を高く評価する一方で、災害頻発国である日本の使命として、「次の一手」は何かを明示することが求められているのではないだろうか。被災地の一日も早い復興を願ってやまない。

無 題

匿 名

災害後の復旧作業も大事だが、それに伴う色々な支援も大切である。

私の知り合いに阪神大震災の被災者がいるが、政府等の公的な機関からの支援は期待できるものではなく、この時心強かったのは民間の組織や、海外からのボランティア、そして普段はあまり繋がりのない地域住民だった。

公的機関からの救援物資の到着も遅く、必要数も不足する中、担当の人間の受け答えもあいまいで、当時の非常時にさえお役所仕事のように感じさせてしまう公的機関の人間の対応に強い憤りを感じていたという。

論文から見れば公的機関の救援は量的には十分とは言えないものの、完全に機能していたことは

明らかである。ただし、指示系統の複雑さにおける行き違いによる無駄な時間の浪費があったこと、またその後の行動においても他の機関よりも後手に回ったことが、被災者に強い不満をもたらした要因であると感じた。精神的な面においては公的機関の対応は十分ではなく、ボランティア組織や被災者同士の助け合いがその役割を果たしていた感は否めない。

今後、これを教訓にして更なる体制の強化と効率化を図りつつ、精神的な面でのフォローも十分に行って欲しいと思う。

「解説と特集記事を読んで」

長谷川雅俊

東海地震のお膝元の静岡県に住んでおり、なおかつ非常時のポケベルを持たされている公務員である私にとって、今年1月から運用されている東海地震の新しい情報体系についてはうすうすは知っていた(うすうす知っているだけではだめなのだが、職場の啓蒙程度ではどうしてもそうならない)。モニター4冊目にして初めて出会った"解説"というジャンルのテーマはその気象庁の東海地震に関連する新しい情報であり、新たに運用されている情報体系を紹介するものであった。改めて勉強になった。本当は一般市民に対するこういった広報を不断の努力で続けていく必要があろう。しかし、学会誌の性格を考えると、この"解説"は専門分野(地震)外の研究者を対象にした"解説"であるようだ。

一般市民を対象とした学会の活動に学術講演会開催毎に市民を対象としたフォーラムがあるようだ。特集記事はそのフォーラムの記録であった。こういったフォーラムは防災や減災の大きな啓蒙になる。学会活動として必要なものであり、今後とも継続していってもらいたい。

特集記事「南海地震対策の現状と課題－防災は総力戦－」を読んで

川池 健司

高知県、高知市の方の「ソフト対策を最優先し、ソフトで対応できない部分をハードで補う」という考え方は、意外であった。避難によって被害を免れることを最優先させるとなると、ハザードマップ等によって危険に関する情報や避難方法に関する情報を市民の間に徹底して伝達する必要がある。その意味で、高知県民の間にどれだけこれらの情報が浸透しているのか、その結果、高知県民の防災意識が他県と比較してどれだけ違うのかということが知りたかった。というのも、先日私が大学で担当する防災関連の講義で、長崎市の発行する土砂災害に関する防災マップが受講する学生の間になんにも浸透していないことがわかったからだ。長崎市民で、実家が急傾斜地危険箇所に含まれていてもそのことを知らなかった学生も多くいた。高知県で実施されている情報の共有化に対する取り組みを、もっと詳しく知りたいと思った。

「防災は総力戦」とはまさにそのとおりで、産官学民がどのように連携すればよいかを情報交換する場として本誌が活用されることを期待する。